

都市近郊の蔬菜園芸 について

—札幌中央市場の動向から—

中原 忠 夫

作況の概要

今年の作況を振りかえつてみると、春先の融雪が早かつたわりに、気温の上昇がおくれ、やや乾燥したので露地ものの生育はおくれた。その後六月に入り天候は恢復し、ここ数年来見られなかつた程の高温の夏を迎えたが、七月下旬以降の多雨のために病害虫の発生も例年より多かつたようである。従つて気象条件から見ると決してめぐまれた年とはいえないが、終始高価を維持されたので懐具合は良い方と言えよう。

野菜類一般の高価は消費増も考えられるが、全国的にわたつて襲つた集中豪雨や台風の影響により、府県主要産地での水害による減産や、出廻りりの不円滑などから、東京、大阪等の大消費で高価に推移したことによるものである。

作付面ではビニール利用によるトンネル栽培が急速にふえ、単に果菜のみでなく、葉根菜など広範囲にわたりとりあげられるようになって来たことである。従来、立地条件とか、府県ものとの競争の面で不利と考えられたがこれらも打開されようとしてゐる。しかし一面、都市の急速な発展によつて、既往の生産地は宅地となつて行くため、より郊外へと移つてゐる。更に貿易自由化、所得倍増におくれまいとする農家は、経営の改善をはかるうとして園芸作物に対する関心を高め地方での作付も漸時伸びている。野菜の生産は高度の土地、技術、労力から成立つてゐるもので、新しい生産地では思うような生産量、品質を確保

し得ない点がみとめられた。

一方消費面から見ると、トンネル栽培による地物の出廻りが早まるにつれ、需要もこれにともなつて伸びて来ている。また食生活の進歩により、消費量も種類による消長が認められ、特に生食野菜の需要が増え、ナス等の漬物用野菜の頭打ちが見られる。更に芽モノとか、小カブ、ミツバ等のいわゆるツマミモノの需要が増し、これ等の性質上年間を通じて要求されるようになって来た。

中央市場から見た蔬菜の動きと品種の傾向について

果菜類、トマト、キウリはトンネル利用の早熟栽培が進み、出荷時期も年々早まりトマトで六月一日頃より見られるようになった。特に今年は五月に日照が多く、トンネル内での生育の良かったこと、技術の進歩、すなわち電熱利用等による早期の定植、高度の管理技術によつて早められたことと思われる。地物は鮮度とか、味の点で府県物に対抗できるけれども、問題は出荷量であつて、他人より少しでも早くといつても、少量では府県物を押えることが出来ない。少なくともある程度纏つた荷を出せるような反別なり、共同が必要であらう。

品種は福寿二号、ひかりが主にとりあげられてゐる。福寿二号はやや病気に弱い欠点を持つけれども、トンネル内での着果良く、初期収量も多い。ひかりは多少茎葉の繁茂するきらいがあるけれども株間をひろげることにより収量のおがる品種である。

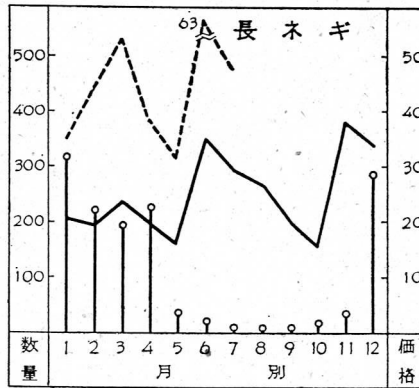
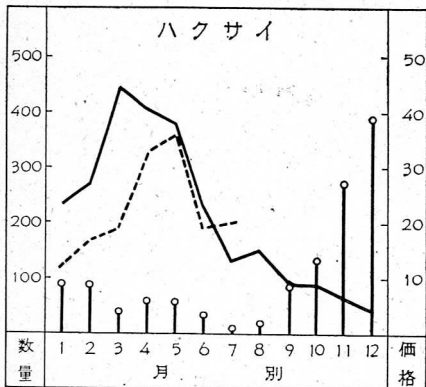
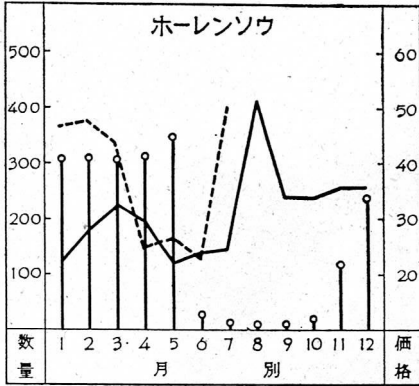
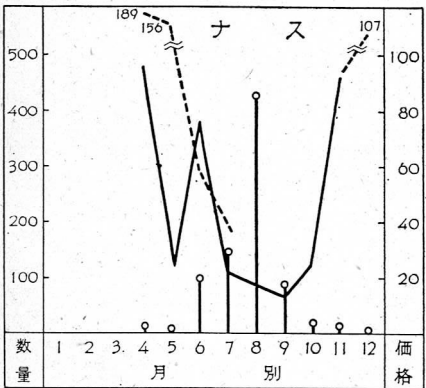
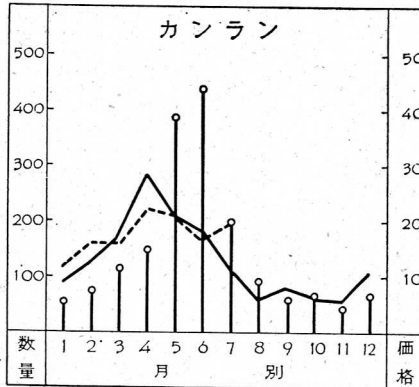
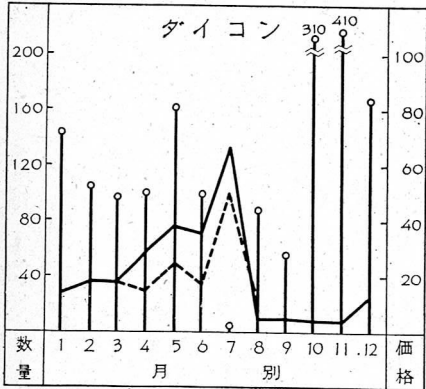
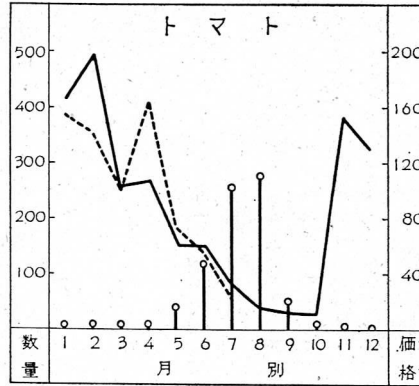
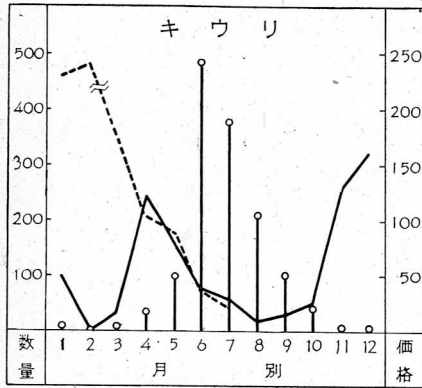
東光は多めに施肥し、多少疫病に弱いので薬剤散布を充分に行ないさえすれば、トンネル、露地いずれにも向く。紅色系の品種としては、日の出、早生赤交二号が疫病に強く、トンネル内の徒長の心配少なく玉揃いの申分ない品種である。

キウリは加賀節成、小城節成の二種ではとんど占められ、目下のところ他種の入り込む余地が少ない。キウリのビニール、ロール紙利用による促成は伸びて来ているけれども、秋の漬物需要期の生産が少なく、例年高騰し、本年もキロ三五〇円の高価を見せた。秋出しをねらつて、六、七月に直接しても罹病率高く、秋末迄株は保ちにくく、多くの場合春播した株を収穫しながら、秋末迄保たせようとする努力が続けられてゐる。このような株では品質の良いものを多量に収穫出来ないから、おそし用の品種栽培法の確立がのぞまれるわけである。

ナスの需要は年々減少しているという事を先に述べたが、家庭での利用減少の他に大手の加工業者が安くて品質の良い府県ものに依存しているのも大きくひびいてゐる。たまたま今年の夏に見せた高値は府県のものへの入荷難のためにおきた例外と見られておる。品種としては金井新交鈴成が依然として人気の中心を占め、大果もぎの出来る新橘真、橘真がこれに次ぎ、早生の新蔓真等も一部で作られてゐる。

スイカはイチゴ、トマトなどと同様早くから店頭姿を見せるようになり、季節物としての感覚を失いかけてゐるものの一

主要品目の出廻時期及び平均価格（札幌中央市場）



である。しかし本年は夏の気温が高かった
ので消費も伸び、最盛期には中央市場だけ
で、一日二〇車以上の入荷を見、府県もの
の出廻りが早く終わったので割合高値を示し
た。スイカの品種としては、手頃の大きさ
で果皮の早生種、新三笠、肉質の良い旭都、
新旭、保ちの良い富研等に人気が集つたよ
うである。スイカはもちろん味の良いたこと

も第一に必要であるが、それをうらづける
保証票、作場の信用も大切なものである。
従つて最近各地で栽培を試みられていて
が、個人々々の出荷でなしに生産の組織化
と、荷姿の改善、産地のP・R等につとめ
ないと有利な販売は考えられない。
カボチャはサツマイモと出廻わりがかち
合い、果物の豊富になつたことから頭打ち

で、品質の良い美園デリシヤス系、東京等
に多少人気の集る程度となつてゐる。
葉根菜、ホーレンソウは出荷が春先に集
中して例年、七、八、九月に品薄となり、
本年も七・五時当たり五〇〇円一、〇〇〇
円台の高値が続いた。夏出しホーレンソウ
は品種もキング・オブ・デンマーク、バイ
キングにしばらくられ、栽培も湿潤な日当たり

の少ない場所でないと思つたように作れない
ものなので、本年のように七月の高温、早
魘が続いた場合高値は当然である。しかし
夏場のホーレンソウの需要は益々伸びてい
るので、催芽播き、日覆い、灌水、病害虫
防除の徹底等の工夫によつて夏の栽培も技
術的にむつかしい問題でないからもつと真
剣にとりくむべきであらう。

(註) 昭和36年度の数量及び8月以降の平均価
格については、統計資料の入手がおくれたた
め省いた。

—— 35年
—— 36年
1kg当り平均価格(円) | 35年数量単位(トン)

その他高値を示した葉根菜では、長ネギ、カンラン、夏ダイコンがあげられる。長ネギは府県の夏タマネギの入荷減から高値を示したもので、例年六月〜八月にかけ荷が少ない。この時期に出る葱の種類はヤグラネギに始まり、二年葱の加賀一本太葱、札幌根深と続き、早出しの一年葱、石倉一本太葱に移る。葱は出荷時期に制約をうけないから平均して出荷することによりうまみをうる事ができる。

カンランは生食から各種調理に向き、最近新聞の広告面をうめている薬用効果の宣伝から極めて需要の伸びているもの一つである。七月頃東京市場で一個二〇〇円もしたということから道内ものもかなり向けられたため、二〇〇円当たり一、〇〇〇円〜一、五〇〇円の相場も見られた。时期的には七月下旬から八月始めにかけて、丁度早生と中生の出廻りの中間の品薄時期で、最近早生甘藍をテント被覆等により早く出す傾向にあるため端境の幅が広くなつたものと考えられる。早生は結球後裂球し易いので長く圃場におけないから、この時期に向ける品種として大型コペン、サクセションが適している。これ等の品種を四月上旬から一週間〜一〇日おきに二〜三度にわけて播くようにするとこの穴をうまくうめることが出来る。秋カンランについては病害の多発、結球を急いだこと等からやや品薄となつたが、漬物の需要減で価格は下がった。併しキロ当たり一三円〜一四円と例年より割高を保っている。

夏ダイコンは作付が少なかつたためさか

りで一本二〇円をこすこともあつた。品種は日の出に始まり時無、美濃早生と続き、美濃早生が開始めると時無の下落が目立つ。美濃早生の播種期は春播不抽薹系を冠した品種も見受けられるけれども、まだ安全なものがない。抽薹の心配のなくなる播種期は七月に入つてからで、多少の危険を見て六月下旬頃を境としそれ以前に播種しようとするればトンネルが必要になる。サラダ用の二十日ダイコンの需要も札幌祭前後だけでなく、年中要求されるようになり、指頭大のブレード栽培品の出荷を市場で希望している。尚葉質の軟らかい小葉系の秋ダイコンを不時播し、葉ダイコンとして一二〜一五センチに伸びた頃束ねて出荷されるようになり、独得の風味と、ビタミン含量の多いことから珍重されている。

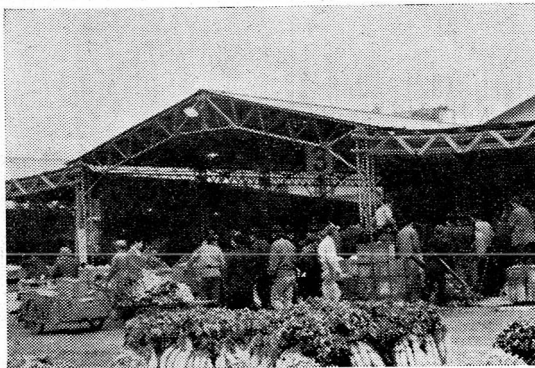
ハクサイはカンランに較べ年々需要の減つているものであるが、これは主として秋ハクサイに言えることで、秋ダイコン等と同様道内の加工業者が府県の大手業者におされているためとも見られる。しかし春夏のハクサイは充分需要をみたしていない状態で質さえ良ければまだのびるものと思われ。質の点でとかく問題になつていことは、外見極めて優れているも心部で抽薹の見られるもの、腐敗しているものが多いことで、特に六月末から七月にかけて出荷されるものに多い。これは品種の確立されてないことにもよるが、稚苗時から旺盛な発育を図り生育期間を成可く短縮するような栽培方法をとらなければ難しい問題である。

洋菜類 年々需要の伸びはみとめられる

けれども品質の点と、出荷期の問題で府県ものに押さえられている。特にセルリーの良質なものの七、八月出しと、レタスの八月以降の出荷が淋しく、栽培技術の向上を望まれている。これらの洋菜類は品質の上下による値開きのはげしいものなので尚更である。

芽モノ 都市近郊で大きくとりあげられるようになったが、特に冬季の需要をみたすに至つていないということである。冬季の促成芽モノとしてはニラ、切ミツバ、糸ミツバ、アサツキ等あるけれども、温室、ビニールハウスが必要なこと、根株の養成に暇がかかるので大量な生産は望めない上に、平均した出荷によらねばならないので特に都市近郊にのみ期待されるものである。

以上主な種類について簡単ながら中央市場の蔬菜の動きを中心にとりあげて見た



札幌中央市場

が、昨年の統計によると中央市場における総取扱高のうち地物の量は二五・五%、金額にして一六・六%を占めるに過ぎない。各地における作付増のため、生産過剰とか、価格の下落を憂える向もあるが過半を府県に依存しているような現在、まだまだ生産を伸ばさなければならぬ面もあるものと思う。ただ府県物に対抗するためには、品質の向上を図り、出荷時期を調節して、荷姿の改善に常に心がけなければならない。そのためには個人々々の生産出荷を続けていたのでなく行かない。生産組合なり出荷団体に結集して産地の形成によつて市場を、ひいては消費者をリードして行くような態勢を一日も早くとることである。とにかく都市近郊には作り上手より販売上手といわれる言葉もあつて却々まとまりにくいものであるが、生鮮食料品である以上、需要にこたえるための計画的な生産と、出荷をはかる必要がある。

札幌中央卸売市場について

市場の開設されたのは一昨年で、昨年より本格的に仕事が始められた。開設後日が浅い上に、古くから生産者に親しまれていた円山、白石市場の立売りも続けられているので地場物の消流の実態をつかむことはむづかしいが、資料の整備によりその傾向を伺い知ることができるので生産者にとつて便利となつた。

現在市場では地場物について、場外市場を設けて終日の荷受態勢を整え、出荷単位の制限も設けず、原則としてキロを単位に指定仲買人、登録小売業者にセリ売りを行なつていく。

(雪印種苗上野幌育種場園芸作物担当者)